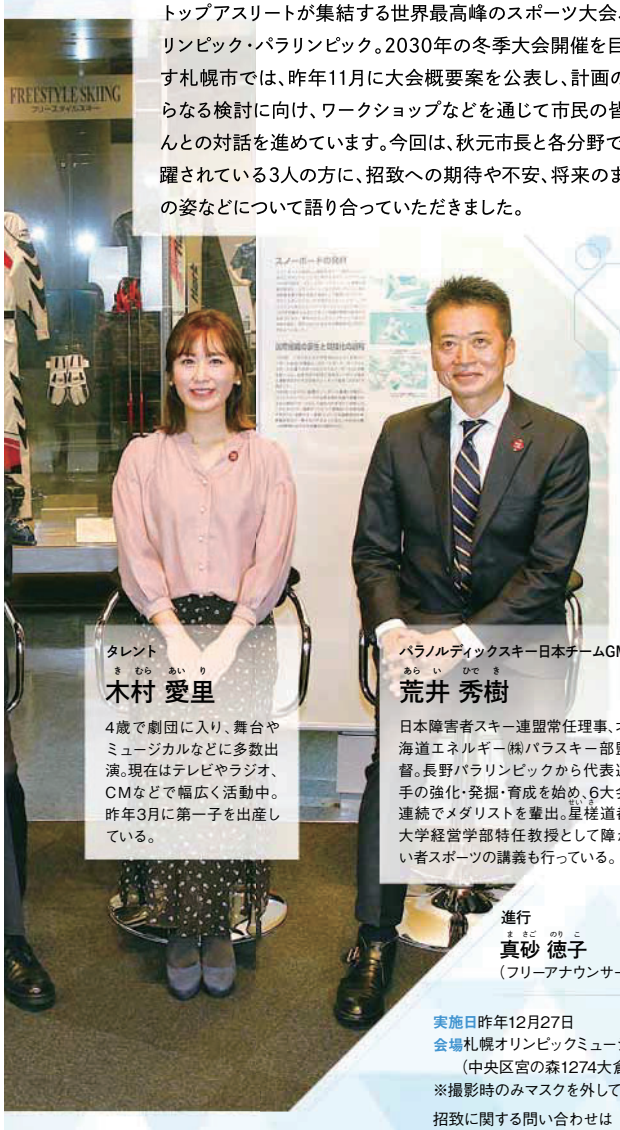
未来へのまちづくりプロジェクト

2030年冬季オリンピック・パラリンピック招致を考える

秋元克広×荒井秀樹×片山めぐみ×木村愛里

座談会

トップアスリートが集結する世界最高峰のスポーツ大会、オリンピック・パラリンピック。2030年の冬季大会開催を目指す札幌市では、昨年11月に大会概要案を公表し、計画のさらなる検討に向け、ワークショップなどを通じて市民の皆さんとの対話を進めています。今回は、秋元市長と各分野で活躍されている3人の方に、招致への期待や不安、将来のまちの姿などについて語り合っていただきました。



タレント
木村 愛里（きむら あいり）
4歳で劇団に入り、舞台やミュージカルなどに多数出演。現在はテレビやラジオ、CMなどで幅広く活動中。昨年3月に第一子を出産している。

パラノルディックスキー日本チームGM
荒井 秀樹（あらい ひでき）
日本障害者スキー連盟常任理事、北海道エネルギー㈱パラスキー部監督。長野パラリンピックから代表選手の強化・発掘・育成を始め、6大会連続でメダリストを輩出。星槎道都大学経営学部特任教授として障がい者スポーツの講義も行っている。

進行
真砂 徳子（まさご のりこ）
（フリーアナウンサー）

実施日 昨年12月27日
会場 札幌オリンピックミュージアム
（中央区宮の森1274大倉山ジャンプ競技場内）
※撮影時のみマスクを外しています

招致に関する問い合わせは
招致推進部調整課 ☎211-3042
冬季オリンピック・パラリンピック招致 検索

招致に期待すること

――まずは市長から、招致への思いをお願いします。

市長 1972年に札幌でオリンピックが開かれたときは、街が急速に発展していた時期で、人口も開催から50年で100万人近く増えました。しかし、これからの札幌は、人口減少や高齢化が進み、2050年ごろには高齢化率が4割を超える見込みです。成熟した社会の中で、街の魅力と活力を維持していくための、今まさに転換期を迎えているといえます。大会概要案で取り上げている、健康や環境、経済、そして共生社会[※1]の実現といった札幌の課題に、オリパラをきっかけに皆さんと一緒に取り組み、さらに魅力ある、持続可能な街にしていきたいと考えています。

――皆さんに招致に期待する点を伺います。

木村 東京オリパラはコロナ禍での開催ということもあって、賛成・反対が分かれた大会だったなと感じています。ただ、実際に始まってみると、日本中の熱量を感じて、やっぱりスポーツの力はすごいなと実感しました。開催が実現するとしたら、自分の生まれ育ったこの札幌が、もっともっと発展していくものになってほしいですね。

片山 私は、誰にでも出番と役割が生まれる機会を、札幌でつくることができる点に期待したいです。選手だけでなく、ボランティアの方や観戦する方など、大会に携わる多くの市民が立場の違いなどを乗り越えて、一つのことに向かう好機になるのではないでしょうか。そこでできた共生の形が継続するコミュニティーとなっていくために、開催後の社会をどうしていくかを見据えた上での招致が重要だと思います。

荒井 私はこれまでパラノルディックスキー日本代表の監督としてパラリンピックに携わってきましたが、オリパラには人や街を変える力を感じていますね。例えばロンドン大会では、地下鉄の駅に、車いすでホームまで自力で行けることや、一人で電車に乗れることを示す案内サインがあることを知りました。それだけでも、車いすを使う方たちが自分で判断できる、自由な生活スタイルがデザインされているなと思いましたね。また、東京パラリンピックでは、ペットボトルの飲み物を、棚に対して種類ごとに縦に並べることで、同じ高さに違う種類が並ぶようになり、車いすを使う方などにも手が届きやすくなっていました。そういうことがコンビニやスーパーでも取り入れられるようになってほしいです。

札幌市立大学講師・社会福祉士
片山 めぐみ（かたやま）
札幌市立大学デザイン学部講師。専門分野は、人々のつながり方やつながる仕組みを設計するコミュニティーデザインのほか、建築計画など。真駒内駅前地区まちづくり検討委員会委員長なども務めている。

札幌市長
秋元 克広（あきもと かつひろ）

※1 年齢や性別、障がいの有無などに関わらず、誰もが互いに人格と個性を尊重し支え合う社会

木村　バリアフリーの話でいうと、ベビーカーを押して市内を散歩するようになって、ちょっとした段差で行けないところが、実はこんなにあるんだということに初めて気が付きました。今のお話を聞いて、足が不自由な方や車いすを使う方に優しい街は、子育てをしやすい街にもなるんだろうなと思いました。

片山　オリパラを通じて多様な背景を持つ方と接することが、インターネットでは調べられないこと、実際に見なくては分からないさまざまなことを気付かせてくれるきっかけになりますよね。

市長　パラのメダリストの方とお話ししたときに、海外では自分に障がいがあることをあまり意識しないが、日本に帰ると残念ながら意識してしまうとおっしゃっていました。1972年の札幌大会のときはパラリンピックをやっていないので、札幌で初めて行う意義は大きいと思っています。施設や歩道などのバリアフリー化が進むだけでなく、心のバリアーもない社会の実現につなげていきたいです。

大会を支える力

――招致の実現には多くの方の協力も欠かせませんよね。

荒井　海外の例だと、カナダではボランティアの方がとても誇りを持って活動しています。子どもたちが大会の見学で最初に行くのは競技会場ではなく、ボランティアが活躍する駐車場や食堂で、そこで車いすを使う方のための降車スペースや机の高さについて説明を受けるんです。小さな町では選手の名前だけでなく、ボランティアの名前を書いたボードを持って、身近なヒーローとして応援するほどです。ボランティアの大切さを伝えていくことが、文化として根付いていると感じましたね。

©サッポロテイネ

片山　日本だとボランティアは自分をささげるみたいなイメージがありますけど、自分が一番楽しんで、それが他の人の楽しみにもつながるのが理想ではないでしょうか。地域活性化の一環として、寿都（すっつ）町で提案したコミュニティーレストランでの取り組みを通じて、いろいろな学びがありました。仕事などでつらいことがあっても、高齢の方から子どもまで幅広い世代のボランティアの方やお客さんと、交流しながらおいしいものを作る、人々を喜ばせるという場にいると、本当に元気をもらえるんですよね。大会では、協力してくれる人たち一人一人の長所や個性を、開催者側がある程度把握した上で協力をお願いできたら、参加者にとってよりやりがいのあるものになると思います。

市長　市内で行われた国際大会に参加したボランティアの方に、他の大会のときも継続して協力していただいています。定期的に国際大会を行うことで、ボランティア文化をレガシー※2として残し、子どもたちにも伝えていければいいなと思いますね。

開催経費への懸念

――開催への期待がある一方で、費用に対する不安の声についてはいかがですか。

木村　東京オリパラで当初いわれていた開催予算が、ふたを開けてみると倍以上になったということで、札幌でも同じようなことが起こるんじゃないかというのが心配ですね。そのようなことが将来子どもたちに、税金などの形で負担を与えてしまうことにならないか、自分も親として気になっています。

市長　東京大会の予算は招致の段階で約7千億円だったのが約1兆4千億円になりましたが、これは当初想定していなかったサイバーテロ対策や、放映のための電力や通信の強化などが求められたためです。札幌での費用は、この東京大会の最終的な費用を基に、札幌の規模に合わせて計算しているので、この費用が2倍になることはありません。また、夏の大会と冬の大会では規模が大きく違い、参加選手は夏の約1万5千人に対し、冬の札幌の想定は約3千人。経費を含めた大会の規模は、5分の1程度になると試算しています。

――東京オリパラについては競技施設の建設費用も話題になりましたね。

市長　東京オリパラでは6会場ほど新しい施設が造られましたが、札幌では既存の施設を最大限活用し、費用の抑制を前提にしています。月寒体育館は老朽化のため建て替えますが、リュージュやボブスレーは長野のコース、スピードスケートは帯広、アルペンスキーはニセコで行うことを想定しており、新しい施設は造りません。

荒井　既存施設の利用は大賛成です。今あるものを最大限生かしていくことを、もっと市民の皆さんに伝えてほしいですね。

市長　施設整備でかかるお金は800億円を想定していますが、ここから国の補助を差し引くと市の負担額は450億円。これをおよそ30年で返していくと考えると、1人当たりの負担は年間900円くらいです。子どもたちの将来への過度な負担にはならないということも、ワークショップやシンポジウムなどを通じてきちんと伝えていきたいです。

※2　大会によってもたらされるもの、得られるメリット

片山　費用が高いか安いかは判断が難しいですが、さっぽろ創世スクエア（中央区北1西1）建設費用の7割くらいのお金で、郊外の施設が数カ所きれいになるということですよね。私は地域のまちづくり活動をデザインする立場として、都心部だけでなく、郊外のリニューアルも必要だと感じています。住宅街の近くにも、スポーツをしない人にとっても趣味の活動や発表の場になる、会議室やカフェのような自宅以外の居場所があることが大切です。普段出会わないような人たちの活動を目にする機会が、地域社会を知るきっかけになります。スポーツ施設も使い方の面で生まれ変わってほしいですね。

木村　東京オリパラで見えた費用などの問題点がクリアされて初めて「よし、応援するために市民として何ができるんだろう」となると思うので、気持ち良く札幌でやろうという声を上げたいですよね。

――不安を感じている市民の声を代表して伝えていただけたのではないかと思います。

木村　市民代表とはおこがましいんですけど（笑）。お話しできてよかったです。

財産としての「雪」

――ウインタースポーツの魅力についてはいかがですか。

荒井　最近は雪の降らない地域に住む子どもたちからも、冬の競技をやってみたいという声が増えているのがうれしいですね。車いすを使う方や足の不自由な方にとって雪は外出へのハードルになってしまいますが、クロスカントリースキーやシットスキーに乗り換えると、今まで行けなかった公園や森の中など自然があふれる場所に行けます。海外では降雪が減っていますし、北海道の雪をうまく活用してほしいです。

市長　冬の札幌は、雪まつり期間以外の観光客数が減ってしまうのが課題の一つです。日本のスキー人口は減少していますが、海外では、例えば北京オリパラを控えた中国のスキー人口は2千万人を超え、さらに増え続けているなど、ウインタースポーツへの需要は高まっています。ニセコは世界的にも有名ですが、札幌市内にも都心部から車で1時間以内の場所にスキー場が6つもあります。世界中が注目するオリパラをきっかけに、パウダースノーに恵まれ、食や温泉も充実している冬の札幌・北海道を、スノーリゾートとして売り込むことで、開催後の経済効果にもつなげられると考えています。

招致は未来への通過点

――最後に皆さんから一言ずつお願いします。

片山　招致には心配な気持ちもありましたが、今日のお話で、ちょっとわくわくの方が勝っていますね。大会を通じて、文化などが違う人たちと接したり、興味があればつながったりと、関係性を選択できる公共の場が整う契機になってほしいです。学生たちにも、若いときだからこその経験、海外とつながる体験をさせたいなと思いました。

木村　コロナ禍での東京オリパラの経験を踏まえて、家族や友人、職場などでも、もっと語り合いたいと改めて感じました。札幌を良くしたいという気持ちは、賛成の人も反対の人も同じだと思います。そして、市民の声を市長にも伝えられる機会がもっと増えると、より良い議論がされていくと思うので、秋元市長、ぜひよろしくお願いします！（笑）

荒井　札幌をどんな街にしていくのか、市全体で、いろいろな世代で議論していくことで、心のバリアフリーが文化として生きていく、そういう優しい街にできるのではないかと強く感じました。ぜひ開催を実現してほしいですね。

市長　2022年は、札幌オリンピック開催と政令指定都市になってから50年、札幌が「市」になってちょうど100年という節目の年です。今日はこれからの50年、100年を見据え、この街の魅力を次の世代につなげていくため、どういうことをしていくべきかを話し合う良い機会になりました。この2030年のオリパラ招致を単なるイベントではなく、準備期間を含めた未来へのまちづくりの大事な通過点にしたいと思っています。市民の皆さんとの対話を通じて、より良い札幌にしていきたいです。

札幌が目指すまちの姿を発信する
シンポジウムを開催

大会開催を通じて目指す札幌の将来像や、共生社会の実現をテーマにした講演などを実施し、YouTube（ユーチューブ）によるライブ・録画配信も予定。東京2020大会金メダリストや、座談会に参加された荒井秀樹氏、秋元市長も出演します。

日時2/20(日)13時30分～15時30分
場所・定員道新ホール（中央区大通西3）。300人（無料）
申し込み市コールセンターのホームページか☎222-4894から、2/11(祝)まで。抽選　札幌市　お申し込み　検索
詳細調整課☎211-3042

札幌オリンピックから50年を記念して
大通公園にモニュメントを設置

五大陸の団結と、大会に全世界の選手が集うことを表現するオリンピック・シンボルを、当時の開幕日である2/3(木)に、聖火集火・歓迎式が行われた大通公園に設置します。

設置場所大通公園（中央区大通西11）**詳細**調整課☎211-3042

▲設置イメージ

▲1972年の聖火集火・歓迎式